

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

支部総会開催さる

7月8日(金)午後6時半より京大会館にて第17回支部総会が開催されました。同日は折悪しく京大職員組合の図書館職員部会と日程が重なり、支部委員8名、一般会員3名の計11名の参加にとどまりましたが、「拡大支部委員会」といった趣きで充実した総会となりました。

討論では主に次期大図研大学と支部報が話題となりました。インパクトの強かった意見を若干紹介します(表現は変えてあります)。大図研大学を始め大図研が企画する催物について。「もっと図書館(あるいは大学図書館、あるいは大図研)という井戸の外に打って出るような企画が持てないか。一般社会との関わりがなさすぎる。それで図書館の使命を果たしているのか」。支部報の編集姿勢について。「(会員の意識を刺激する意味で)もっと物議を醸すような記事を書いて議論を挑発し、それによって研究を組織していくというスタンスを持ってもいいのではないか」「会報の定期発行は内容の如何に匹敵する程重要である」「班活動を活性化するならその材料になるような内容のものを」等々。

また、次年度会費(全国)の値上げが全国大会(8月、山口)で提案される旨の報告が全国委員の方からあり、そこから派生する様々な問題が議論され、今まで持っていた会費に対する認識の甘さを改めて反省させられました。

予算決算は若干の修正を経て可決されました。最後に支部委員の新体制(下記)が提案・確認されて閉会となりました(次頁以下に決算・予算)。

支部委員 篠原俊夫(京都大学法学部図書室)
竹本文夫(同志社大学人文科学研究所)
松原 修(立命館大学びわこくさつキャンパスメディアセンター)
吉井紀子(京都大学法学部図書室)
大館和郎(京都学園大学図書館)
小林倫道(京都橘女子大学図書館)
川北恵美子(京都大学附属図書館)
堤美智子(京都大学人文科学研究所)
会計監査 末益尚文(京都大学医学部図書館)
竹村 心(京都大学教育学部図書室)
全国委員 竹本文夫(同志社大学人文科学研究所)

目 次	
支部総会開催さる	(1頁)
1993年度決算および 1994年度予算	(2頁)
京都研究集会アンケート 集約結果報告	(5頁)
種田山頭火にひかれて22年 (藤津滋生)	(7頁)

●大学図書館問題研究会京都支部1993年度決算および1994年度予算

1993年度決算 (1993.8~1994.6)

総収入	総支出	差引残高
280,415	199,446	80,969

(収入の部)

項目	予算	決算	備考
繰越金	90,415	90,415	
1993年度会費	170,000	166,600	98名分
1992年度会費	0	3,400	2名分
支部活動援助費	10,000	10,000	
カンパ	10,000	10,000	
合計	280,415	280,415	

(支出の部)

項目	予算	決算	備考
会報	50,000	29,528	
印刷費	20,000	10,960	
郵送費	28,000	18,568	
通信費等	2,000	0	
研究交流集会費	50,000	23,744	
合同例会	10,000	12,680	
支部総会	10,000	6,944	
研究集会	30,000	4,120	

大図研大学補助	110,000	15,014	案内状等の郵送料
全国委員会参加補助	30,000	30,000	
事務費	5,000	1,050	
特別事業基金繰入	0	100,000	大図研大学積立金として
雑費	35,415	110	
合計	280,415	199,446	

1994年度予算 (1994.7~1995.6)

(収入の部)

項目	予算	備考
繰越金	80,969	
1993年度会費	170,000	
支部活動援助費	10,000	
1993年度大図研大学 剰余金	40,491	
合計	301,460	

(支出の部)

項目	予算	備考
会報	50,000	
印刷費	23,000	
郵送費	25,000	
通信費等	2,000	

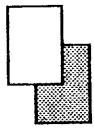
研究交流集会費	45,000	
合同例会	20,000	
支部總會	10,000	
研究集会	15,000	
特別事業基金繰入	90,491	大図研大学 補助/前年度剰余金
全国委員会参加補助	30,000	
事務費	3,000	
予備費	80,000	
雜費	2,969	
合計	301,460	

特別事業基金 決算

項目	予算	決算
繰越金	300,000	300,000
1993年度繰入	0	100,000
合計	300,000	400,000

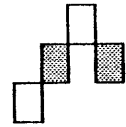
特別事業基金 予算

項目	予算
繰越金	400,000
1993年度繰入	90,491
合計	490,491



第3回大学図書館員京都研究集会

アンケート集約結果報告



大図研京都支部では、大学図書館員京都研究集会に向けて、テーマに「利用者教育（ガイダンス）」を想定したアンケートを7月に実施しました。ご協力有難うございました。

残念ながら回答数50件（44%）という低調なものに終わってしまいました。これは財政的な問題で返信用切手を同封出来なかったのが原因であると思われます。結果的に支部委員のいない大学の会員からのニーズはほとんど集約することができませんでした。今後の教訓として生かさなければならぬと思います。

というわけで不本意な結果ではありましたが、アンケートの集約結果と概略をここに報告します。

1. テーマについて

1) 興味関心	「興味がある」	76%
2) 参加意欲	「参加したい」	40%
3) 興味のある項目		
① 新入生ガイダンス		34%
② 上回生向けガイダンス		32%
③ ニューメディアに対するガイダンス		44%
④ 特定主題に関するガイダンス		52%
⑤ 利用者教育に必要な参考図書の研究		62%

4) 基調報告で取り上げて欲しいテーマ

① 大学図書館における利用者教育の定義	24%
② 海外における大学図書館の利用者教育	42%
③ 利用者教育の方法論	54%
④ 大学図書館の利用者教育の現状と課題	52%

2. レポート内容について

レポート内容については、「専門図書館や比較的小規模な教室および図書室等でのような工夫されたガイダンスが実施されているのか知りたい」「AV資料を活用してのガイダンスの実例報告をして欲しい」「自然科学の分野でのガイダンスの実践例を知りたい」

などが上げられていました。

また「実施方法については発表者が実際のガイダンスを行い、それを参加者が学生の立場になって聞いてみるというもの面白いのではないか」という意見もありました。

具体的な図書館(室)には、京都大学附属図書館、京都大学法学部図書室、京都大学経済学部図書室、大阪市立大学医学部分館、京都橋女子大学図書館が挙がっていました。

3. 日程について

① 土曜日の午後	56%
② 日曜日の午前から1日	8%
③ 日曜日の午後から半日	10%
④ 平日の夕方	18%

4. 所属図書館(室)での実施しているガイダンスについて

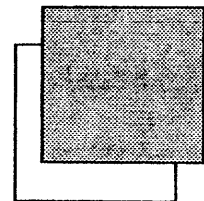
① 新入生ガイダンス	72%
② ゼミ対象など上回生向けのガイダンス	42%
③ ニューメディアに対するガイダンス	18%
④ 個別のテーマに関するガイダンス	6%

アンケートの結果を概略してみると、テーマについては多くの会員が興味関心を持っており、研究集会で取り上げるテーマとしてはまず妥当であると言えるでしょう。関心の内容には所属館室の実施しているガイダンスとの相関関係が見られる一方、ニューメディアに対するガイダンス、特定主題に関するガイダンスや参考図書の研究など、まだ各大学での取組みが浅い部分にも関心が高いようです。

基調報告のテーマには、利用者教育の方法論や、大学図書館の利用者教育の現状と課題に強い要望が見られます。

日程については、圧倒的に土曜日の午後を望んでいる会員が多いようです。

このアンケート結果を支部委員会に反映し、今秋の研究集会を実りあるものにしていきます。是非、一人でも多く参加して下さい。この大学図書館員京都研究集会はオープン形式ですので、レポーターの要請も含め大図研の近畿4支部を巻き込んだものになります。もちろん会員以外の方の参加も大歓迎。ご近所に座っている同僚の皆さんも是非お誘い合わせの上、ご参加をお待ちしています。



種田山頭火にひかれて22年

藤津 滋生

1. 山頭火ブーム

ある人は山頭火ブームは終わるだろうと予言した。生誕100年の1982年頃が第二のピークで、毎日新聞社が主催した「生誕100年漂泊の俳人種田山頭火展」の会場は熱気に包まれていた。私はこの年に今まで同人雑誌に発表した山頭火関係の文章と好きな山歩きの文章を一本にして『山頭火人形と山日記』（檸檬社'82）という本を上梓した。山頭火関係の有名な本と私の本が同じところに並んでいてなぜか気恥ずかしい思いをした。

次の第三のピークは没後50年の1990年に起こった。この時は読売新聞社が「種田山頭火展」を各地で開いた。これにあわせて生まれ故郷の防府で初めての全国山頭火フォーラムが二年後の1992年10月に開かれた。この成功に気をよくした各地のファンが次なるフォーラムを計画した。2回目は第二の故郷熊本で昨年開催された。三回目の今年、放浪の山頭火が6年にわたって庵住した場所の小郡で開かれる。4回目も、5回目も決まっているらしい。この調子では山頭火ブームはまだ続くようだ。書店の俳句コーナーでは、個人としては山頭火関係のものが一番多いような気がする。第一回のピークは高度経済成長期の1960年半ば頃から起こった。生活は豊になったものの、がんじがらめの世の中に窮屈を感じ、自由に生きた山頭火に救いを求めたかったのだろう。私が山頭火を知ったのは1972年のことである。所属している地元の文学の会の例会が終わり、2次会に出かけた。隣に座った山口県出身の同人から「君も山口県人らしいが、種田山頭火という放浪の俳人を知っているか。」と聞かれた。その時私は図書館に勤めていた。文学部のある大学だったら1冊や2冊の山頭火関係の本はあっただろうが、外国語大学であったためか全然なかった。明るる日、文学辞典などで調べるうちに興味を覚えてきた。

最初に出た『山頭火全集』（全7巻 春陽堂'72）を求め、伝記書などを読んだ。足跡が知りたくなり、まず1974年7月に松山を訪ねた。ここは山頭火の終焉の地であり、「一草庵」という庵もある。次は翌年第二の故郷となった熊本に出かけた。また翌年、生まれた防府から小郡、湯田を訪ね、川棚にも足をのぼした。

シェイクスピアの生没年（1564～1616）の覚え方（ヒトゴロシ～イロイロ）ではないが山頭火にも覚えやすい3つの転機がある。

まず、生まれたのが山口県防府市で明治15年。

山林独住に耐えられず、解くすべもない迷いを背負って行乞流転の旅に出たのが大正15年。

そして最後に死んだのが愛媛県松山市で昭和15年。3つとも15が付く。

よくなんでそんなに山頭火にひかれるのか、と聞かれる。まず、同県人であること、第二にその分かりやすい自由律の俳句にある。とくに僕の好きな俳句は、旅の句である。人口に膾炙している、

分け入つても分け入つても青い山
笠にとんぼをとまらせてあるく
へうへうとして水を味ふ

だまつて今日の草履穿く
 酔うてこほろぎと寝てみたよ
 あるけばかつこういそげばかつこう
 ほろほろ酔うて木の葉ふる
 山ふところの、ことしもここにりんだうの花

などである。

II. 書誌から知る辞典へ

今年2月末、『種田山頭火を知る事典』を自費出版した。作業を始めてから5年かかった。最初は一般的な文献目録を中心とした書誌を考えて作業に入った。せいぜい文献も500件とふんでワープロで入力にかかった。ところが、文献だけで500件どころか、1000件を越える見通しとなった。急遽、パソコンに強い友人に頼んで、ワープロ文書をパソコンに転換してもらった。第一次原稿をもって1992年10月に防府で開催された第一回山頭火フォーラムに参加した。ここで、名前だけを存じ上げていた研究者に会うことができ、その原稿を渡し、書誌作りの協力を依頼した。ぼくの手持ちは7割とと思っていた。その通りで、主に二人の方から残りの3割の資料を御提供いただいた。作業を進めていくうちに、山頭火は文献だけではとらえきれないと感じてきた。ほぼ完成に近付いていた原稿を見直して「知る事典」として再編集にかかることにした。今まで、伝記関係でこのような事典は出来ていないようなので、試行錯誤の連続であった。

これ一冊あれば山頭火のほとんどのことが分かるようにした。

まず最初に、「生涯」を持ってきた。2に「書誌」。特に今までの単行本の後ろに付いていた参考文献で手薄だった新聞に力を注いだ。3は「非図書資料」。これはいかにも型やぶれの人生を送った山頭火らしく、テレビ、音楽、芸術作品、はたまた土産物にもなっている。それらをなるべく網羅した。4は「関連」として山頭火の周囲の人々、研究家名簿、全国句碑一覧、などである。最後に、「雑誌・新聞・紀要名索引」と、「人名索引」を付けた。資料件数は全部で1902件となった。

山頭火の放浪の足跡の南は鹿児島県の志布志町、四国は全域、本州の北限は岩手県南部平泉の中尊寺までである。山頭火はせいぜい関東止まりと思っていたところ、新潟県の新聞にも、北海道の新聞にも取り上げられて、びっくりした。句碑は全国に232基(1992.12現在)もちらばっているのも驚きだ。今年で250基にはなっているだろう。ちなみに句碑の中で一番多いのが万葉集で現在は1140基を数えるようだ。

まあ、このような人物研究が出来たのも、対象である山頭火という大物を知ったからである。その点では、山頭火に感謝しなければならない。今私は図書館を離れているが、こうした仕事は本来図書館員の仕事であると思っている。図書館には宝の山が沢山あり、その宝を自由に使えるのは図書館員である。山頭火も一時期、東京の公共図書館に勤めたことがある。我々の大先輩である。

自費出版としたのは、100%自信がなかったからである。案の定、購入していただいた方々から未記入の資料を沢山提供いただき感謝している。同好の士とはありがたいものである。5~6年先をメドにより完全な事典を作ろうと思っている。

(ふじつ・しげお/関西外国語大学視聴覚教育センター)